

令和8年度 北海道七飯養護学校おしま学園分校 学校経営方針

～「子どもを真ん中に」ワクワクする学校を、私たちの手で～

1 はじめに

令和8年度の学校経営方針は、令和7年度のグランドデザインで大切にしてきた「生きる力の育成」や「チームで」といった土台を継承しつつ、さらに一歩踏み出し、「子どもの20年後の幸せ」を見据えた具体的なアウトカム（成果）を目指すものへと進化します。

なぜ、「20年後」なのか。この20年間で、できないことを反復で克服させる「訓練」からテクノロジー等も使いながら児童生徒の得意を引き出し、社会へつなぐ教育へ。安全に過ごすことや身の回りの自立を目標とする教育から、障害者差別解消法等の法整備により、「自分はどう生きたいか」という本人の意思決定を支援する教育へと特別支援教育は大きく変わりました。

20年後はどうか。テクノロジーの進化により、メタバースとリアルの融合をはじめ、AIを含むデバイス（道具）を使いこなすことなどで、卒業後の暮らしが大きく変わっている可能性があります。

私たちの仕事は、できないことを教えることだけではなく、こうした未来を予測し、これまで以上に、児童生徒のやる気を引き出したり、悩みを相談したりする「心のケア」や「コーチング」を行うことを重視する伴走者としての役割が増すと感じています。

令和8年度、私たちの合言葉は、「子どもを真ん中に」です。

今の社会は激変しています。その中で、私たちが向き合う子どもたちが「20年後」にどんな笑顔で過ごしているか。それを保護者やおしま学園職員、地域の皆さんと「ワンチーム」で描き、形にしていくのが本校の使命です。

今年度の重点は、「子ども真ん中に」ワクワクする学校 ～チームから組織へ～です。単なる仲良しグループではなく、専門性を持って機能する「組織」として、子どもたちの人権と私たちのウェルビーイングを両立させていきたいと思います。

2 目指す児童生徒像

(1) 見通しをもち、安心して行動する

児童生徒の実態に合った分かりやすい環境の中で、「次はこれをしよう」と見通しを持って動ける力を育てます。

(2) 自分らしく表現する

言葉、ICT、写真など、児童生徒に合った道具を使いこなし、「自分で選んだ」という自信を持って意思表示をすることを目指します。

(3) 社会の中で活動する

学校の中だけで完結せず、地域との関わりの中で「自分の得意なことが誰かの笑顔につながる」という実感を積み重ねます。

3 具体的な教育の柱：資質・能力と「3つの約束」

この姿を実現するために、私たちは3つの視点でアプローチを統一します。

(1) 「分かる・見通せる」から、安心できる（知識・技能）

令和7年度の学校評価を分析すると、「次に何をするか、自分で分か
りたい」と思っている児童生徒がいることが推察されます。分校ではこ
れまでも、あおいそらのコンサルテーションを受けるなどして、自閉症
のある児童生徒の教育環境を整えてきていますが、児童生徒が「次に何
をすべきか」を自分で判断できる環境をさらに充実させて行きます。そ
のためには、自閉症の障がい特性の理解を深める研修を継続し、「なぜ
構造化をするのか」という基本的な事柄にとどまらず、一人一人にオー
ダーメイドされた教育環境を提供し、児童生徒の「分かる・見通せる」
を目指します。

(2) 「できる・選べる」から、自信がもてる（思考力・判断力・表現力等）

校内では、授業の課題選びや給食のメニュー、行事など、日常の中で
「どちらにする？」という小さな選択から始め、「自分で決めた！」と
いう経験を積み重ね「できる・選べる」喜びを提供します。

こうして身に付けた自己決定する力を地域の行事や他校との「交流及
び共同学習」などの場面で発揮することで、児童生徒の自信につなげま
す。

(3) 「認めてくれる・つながる」から、うれしい（学びに向かう力・人間性）

児童生徒の欠点を探すのではなく、「今、頑張っていること」に光を当て、褒めるポジティブ行動支援（PBS）の文化を学校全体のスタンダードとして定着させることで、児童生徒が「認めてくれる」から嬉しいと感じる体制を構築します。

4 学部別重点事項

小学部では、毎日のルーティンを重視する中で「安心・安全と生活リズム」を整えます。

中学部では、作業学習をはじめとする様々な学習場面でルールの遵守や報告、相談するスキルを習得することを重視する中で、働く態度の基礎を身に付けます。

高等部では、自ら助けを求められるよう、ICTなども活用する中で自立と社会参加に向けた力を高めて行きます。

こうした重点の達成に向け、今年度は新たに「行動マトリクス」を活用し、一貫した支援の充実を図ります。

5 私たちの働き方改革：大人の余裕が子どもの笑顔を作る

子どもたちの幸せを願う私たちは、往々にして自分自身を後回しにしがちです。しかし、疲弊した教職員が、子どもたちの変化に敏感に気付き、温かく寄り添うことは困難です。今年度は「子どもを真ん中に」次の改革を実施します。

(1) 業務の「平準化」と「スリム化」

特定の時期に業務が集中しすぎるのを防ぎ、教職員との対話の中で、無駄を削ぎ落とします。長年続いている行事でも「何のために行うのか」を改めて問い直し、形骸化している部分は大胆に簡略化（スリム化）します。

また、行事の準備と校務分掌の繁忙期などが重ならないよう、管理職と教職員でスケジュールを柔軟に見直すことで、精神的・体力的に追い詰められる「逃げ場のない忙しさ」を解消します。

(2) 業務の「可視化」と「移管」

担当者が、抱え込みすぎない体制を作ります。

事務処理や細かい調整など、表に出てこない「見えない時間」に上限を設けるほか、削減できた時間を公表することで、組織全体の効率化への意識を高めます。

また、学校だけで全てを背負わず、簡略化を進めることや、学校運営協議会やPTA等と連携して業務を削減する方法を模索します。

(3) AI の活用

個別の指導計画などの文書や会議録作成において、ゼロから書くのではなくAIに「たたき台（0→1）」を作らせます。これにより、教職員が最も大切にすべき「子どもと向き合う時間」を確保します。

(4) 専門機関等との連携

おしま学園等の外部機関と密に連携し、支援の目標や具体的な手立てを効率よく共有できる仕組みを継続します。

一人の担任が全てを背負い込む時代ではありません。保護者、学園職員、外部専門家とのケース会議をより円滑に行い、個別のニーズに対する目標や手立てを組織で共有する仕組みを強化します。

(5) ウェルビーイングの向上

令和7年度に引き続き「同僚・協働性」と「自主・向上性」という尺度を用いながら、定期的に組織の状態を点検し、教職員一人ひとりが「この学校で働けてよかった」と思える環境を目指します。教職員が組織全体のことを主体的に考えつつ、自分の強みを最大限に発揮することに「喜び」を感じられる心理的安全性の高い環境を整備します。

「大人の余裕」を、子どもたちの未来のために。共に、新しい学校の形を作っていくしましょう。

6 令和8年度の具体的な目標

特に以下の指標にこだわります。

- **生徒指導の共通理解(重要課題)** 令和7年度80%に留まった「共通理解」の項目を向上させ、組織的な指導体制を構築します。
- **教職員のウェルビーイング** 「自律的共同群(自ら考え、共に動く状態)」に位置すると感じる教職員を増やし、仕事へのやりがいを最大化します。

- ・ 例年の内容を効率的に実施令和7年度62%にとどまったこの項目を大幅に向上させ、教職員の実感が伴う働き方改革を進めます。

結びに代えて

令和8年度の学校経営方針は、学校評価や職員会議、学部や分掌部の年度末反省等の機会を通じて得られた先生方お一人お一人の貴重な御意見を反映し、作成することができました。この場をお借りして感謝申し上げます。

「子どもを真ん中に」一人で抱え込まず、チームで、そして組織で、ワクワクする学校を創っていきましょう。

令和8年4月1日

北海道七飯養護学校おしま学園分校 校長 山内 功